

研学の織匠 近藤徳太郎



近藤徳太郎は京都府の官費留学生として、明治十年十一月十九日、横浜からフランスに旅立っている。

京都府は殖産の将来構想にもとづいて、かねてより組織的な留学生派遣を考えていた。そして御雇外人レオン・ジュリーの発案により、彼の帰国時に仏語学校、中学校、師範学校から優秀な人材を選んでフランスに留学させることにした。近藤はこのとき織物分野の研究生に選ばれたのである。

近藤は安政三年生まれであるから、このときすでに二十一歳、一行八人の中でも年長の一人である。しかし彼が選ばれるにはそれだけの素地があった。履歴書を見ると、仏語学校卒業後も東京に移ったジュリーの許で仏語を学びながら、勸農試験場で、製糸、撚糸、養蚕業を三年にわたり修学している。京都府は近藤を初めから織物の専門家として育成するつもりであったと思われる。東京留学

は京都府の内命によるものであり、フランスから帰国後も、経営不振で一たび民営となっていた織殿を再び官営にしてまで、京都府は近藤を迎えているからである。

渡仏後の近藤はリヨンの織物学校に入学、絹糸についての科学的研究、さらには織物全般の原理を学び、各地の織物工場に入って機械の実習を重ねている。ヨーロッパの織物生産の技術を体系的に習得したわが国最初の人といえよう。

五年の研究を終えて帰国した近藤は織殿長として四年間、機械技術の普及に努めた。ジャカードの仕組みを理解させるために、教材としてリヨンからドビーを取り寄せ、荒木小兵衛に模倣など、西陣明治中期の機械近代化に大きな役割を果たしている。明治二十年、織殿が母体となって官民一体の京都織物会社創立時には再び渡仏、蒸気式の自動織機を研究、導入に参画している。こうした近藤の履歴を見ると、彼は単なる機械の技術者ではなく研学の人であった。写真はレオン・ジュリー。

(九月号文中の府染色試験場及び染織学校は『市染織試験場』及び『織物学校』の誤りでした) (福本武久)